



## 【良い知らせを伝える使命】

聖書箇所：列王記第二7章3～10節 説教者：鄭南哲牧師

### <本文の背景>

#### \*北イスラエルの王たち

イスラエルはダビデの王の息子ソロモン王が死んだ後、ソロモン王の息子レハブアム王によって、エルサレムを首都とした南ユダ王国と、ヤロブアムによってサマリアを首都とした北イスラエル王国に分かれてしまいました。特に今日の背景となる北イスラエルはBC930年に分かれてから、BC722年アッシリア帝国に完全に陥落されるまで、208年という短い期間でしたが、実にそのうちに19人の王が変わりつつ統治して来たことが分かります。しかし、残念ながら北イスラエル王の19人中では、神の前で一人も良い王として評価されず、偶像崇拜を諦めず、罪から離れず、そのまま踏襲(とうしゅう)し続ける姿を通して、人間の深い罪深さを見ることが出来ます。

また、罪から完全に断ち切れない北イスラエルの王と民の姿を通して、人は決して自分の力だけでは罪から完全に離れ、救いに至ることが出来ない人の絶対限界を悟ることが出来ます。

しかし、それにも関わらず神様は、その208年間、耐え忍びながら、絶えず神の預言者(エリヤ、エリシャ、ホセア等)絶えず立てて遣わしながら、悔い改めて、真の神に立ち返るように、彼らを守り、助け、救い出し続けて下さる、神様の深い愛と哀れみを見ることが出来ます。

今日もこの礼拝の時間とは、生きておられる神様の深い愛と哀れみを頂き確かめ、もう一度神に立ち返り、謙遜に神を信じ、従う決心をする時間となりますように心からお祈り申し上げます！

### <今日の本文の背景>

今日の本文の出来事は、北イスラエル9代目の王ヨラム(Jehoram/即位 852-841・北イスラエルの王の中一番神の前で悪を行っていたアハブとイゼベル王妃の二番目の息子)不信仰なヨラム王はイスラエルが苦しんでいる理由が神の人エリシャのせいだと思い込み神の預言者エリシャを殺そうとするほど、神の前で悪を行っていたため、10年間も近隣の国アラムの攻撃を受け続けていましたが、今日の本文は2回目、首都サマリア城が包囲されてしまいます。その包囲されてしまった期間が数カ月も続いたでしょう。結構長かったため、サマリア城内では食糧難によって、信じがたい残酷な状況が生じ

ていました。

6章 29節「それで私たちは、私の子どもを煮て食べました。その翌日、私は彼女に『さあ、あなたの子どもをよこしなさい。私たちはそれをたべましょう』と言ったのですが、彼女は自分の子どもを隠してしまったのです。」

(みなさんは家族を苦しめる問題がある時にどうしますか。どうするべきでしょうか。)

#### <4人のツアラアトに冒された人々の反応>

サマリア城内はこんなに残酷な状況になっていた時、城内の入り口にいた4人のツアラアトに冒されていた人々に聖書は注目しているのです。

イスラエル社会では、ツアラアトに冒(おか)された者は隔離されていました。

3節、四人のツアラアトに冒された者たちが町の門の入り口にいたのはそこで人々から食べ物をもらうためだったのでしょう。アラム軍の包囲によって生きるすべてを失った彼らは、死を覚悟してアラムの陣営に行くことにします。ところが、彼らがアラムの陣営に行ってみると、そこにはだれもいませんでした。

神様がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせられたので、彼らは連合軍が自分たちを襲って来たと思い、7節「夕暮れ」にすべてを置き去りにして急いで逃げて行ったのです。神は、ご自分の民が知らぬ間に、お一人でアラム軍を打ち破り、救いのみわざを成し遂げられました。

(アラムの陣営には、なぜだれもいなかったのでしょうか。みなさんは知らない間に神様が成し遂げられたみわざは、どんなことですか。)

7章 1節を見ると、実にそれは神様がすでに神の人エリシャを通して、イスラエルの人々を憐れんで下さる神様が「一日の奇跡」を起こして下さることを約束された出来事でした。「エリシャは言った。「主のことばを聞きなさい。主はこう言われる『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉(こむぎこ)ーセアが一シェケルで、大麦ニセアが一シェケルで売られるようになる。』」(物価が以前のように戻る・日常生活が取り戻され、安定される)

ツアラアトに冒された者たちは、だれもないアラムの陣営で空腹を満たし、金銀や衣服を奪います。死を覚悟して行った場所で大きな恵みに出会ったのです。ところが、分捕り(ぶんどり)品を隠しているうちに、彼らは良心の呵責(かしゃく)を感じてきました。飢え死(うえじ)にする人々がいるのに、自分たちだけが良い思いをして、しかもそれを黙っていたら、神様から罰を受けるだろうと恐れたのです。

ツアラアトの者たちは、町の中に入ることも出来ず、人々に物乞いをして生きる境遇

(きょうぐう)に置かれていても、神様を意識し、危機感を持った町の人への哀れむ心を失いませんでした。

彼らは、その夜、サマリアの町に行って、門衛にアラムの陣営の状況を伝えました。人々から汚れていると、のけ者にされていた者たちが、神の御力の目撃者、良い知らせの伝達者となりました。ですから、我らに出来ないわけがありません！あんなにツアラアトの者たちも伝える者として用いられたならば、我らもどんなに弱くても用いられます！今我らにも必要なのは、神を信じ、愛する人々への霊的な危機意識を持って憐れむ心をもっと必要ではありませんか。

<我らに与えられている使命：福音を伝える>

ツアラアトに冒された人たちは、アラムの陣営が撤退(てったい)したという良い知らせを王の家に知らせました。どんな良いことでも、伝える人がいなければ聞くことが出来ません。神様は私たちに、救いの福音を伝えなさいと言われました。

\*イザヤ書 40 章 9 節「シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ、力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」」

\*エレミヤ書 20 章 9 節「私が、「主のことばを宣べ伝えまい。もう御名によって語らない」と思っても、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」

\*テモテ人への手紙第二 4 章 2 節「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」

福音に対して負い目のあったパウロは、「私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えないなら、私はわざわざです。私が自発的にそれをしているなら、報いがあります。自発的にするのでないとしても、それは私に努めとして委ねられているのです。(コリント人への手紙 9 章 16-17 節)」つまり、福音を宣べ伝えなければ、自分はわざわざだとほどまで言いました。\*伝えることは、特別な人だけに与えられている使命ではなく、福音を語ったすべての人の使命なのです。

\*福音のそのまま：ルカの福音書 2 章 10-11 節「御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせ

ます。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」

第一コリント人への手紙 15章 1-4節 「1 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせましょう。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。2 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。」

\*ローマ人へ手紙 10章 8-11節 「では何と言っていますか。「みことばは、あなたの近くにあり、あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちが宣べ伝えている信仰のことばのことです。9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。11 聖書はこう言っています。「この方に信頼する者は、失望させられることがない。」

イエスの愛・私の愛・イエスの十字架・私の罪の十字架！イエスの死・私の死・イエスの復活・新しい私の復活・イエス命・私の命！

\*使徒の働き 1章 8節 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

聖霊の神様に福音を伝える、分かち合える知恵を！力を！憐れむ心を！霊的な危機状態であることを見、気づくことができるように常に助けを求めましょう！

<祈り>

\*エペソ人への手紙 6章 19節 「また、私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう、祈ってください。」

予測することも察することもできない方法によって私の人生に働かれる神様の恵みを賛美します。多様な人や状況によってすべての習慣を守り導かれる神様を信じ、神の救いの喜びを、ためらうことなく周りの人に伝えることができますように。